

# 鑑賞する身体

## —芸術作品と知覚、その可能性をめぐって—

絹川 恵梨花

本論文では、芸術作品の鑑賞体験における新たな視座を提起することを試みる。一般的に鑑賞というと、視覚的な鑑賞が前提とされる。視覚的に鑑賞する、つまり「見ること」とは、作品において何が描かれているのか、または作者がどのような意図を持って制作したのか、それらの理解を進めることが想定されている。それは美術館の展示方法や芸術環境を取り巻く事象を考えてみても、視覚的な鑑賞が一般的なものとして捉えられていることが伺われる。こうした芸術に対する眼差しは一方で、ある一部の人々にのみ開かれたものになりかねない。芸術はより社会に開かれたものであるべきという立場に立つと、作品を目の前にして「わからない」と感じる、その疑問や違和感すら、鑑賞の一つのあり方として肯定的に捉えていくことはできるのではないだろうか、というのが筆者の問題意識である。そのため、視覚的に「見ること」を乗り越える鑑賞を考える上で、共通感覚としての触覚によって鑑賞する身体を意識化し、身体的に鑑賞することのあり方を考察していく。

第1章では、作品受容における現状と問題点を提出する。いかに作品を鑑賞する際に「見る」ことが奨励されてきたのか、河原啓子『近代芸術受容の近代的パラダイム—日本における見る欲望と価値観の形成』(2001)において言及されている、「見る欲望」の歴史的な成立背景に関わる展覧会という視覚装置に注目する。また、鑑賞教育の現状についても考察することで、作品を見るという行為が教育の現場においてどのように助長されてきたのかを概観するとともに、それに代わる鑑賞教育として「対話型鑑賞」の実践およびその限界についても考察していく。

第2章では、西洋近代において視覚が特権化されてきた事実を確認しつつ、触覚を感覚の基礎として捉えなおす「共通感覚」の議論を援用する。とりわけ中村雄二郎『共通感覚論』(2000)において考えられている、共通感覚としての「触覚」に注目するメルロ＝ポンティの運動を伴う視覚という観点から、芸術作品の鑑賞において、触覚的な鑑賞＝身体的に関わることの可能性を

考えていく。メルロ＝ポンティの論から、ヴァルター・ベンヤミン『複製技術の時代における芸術作品』(1936)にて考えられている「視覚的無意識」の概念を援用しつつ、鑑賞する身体を意識化のプロセスを明らかにしていく。この「視覚的無意識」において、身体の拡張と感覚麻痺というキーワードを抽出する。また、芸術作品を視覚メディアとして捉えた場合、マーシャル・マクルーハンの主要な論である、メディアは身体の拡張および自己切断という捉え方へとつなげることで、作品鑑賞において引き起こされる身体の拡張・自己切断といった感覚麻痺を考えることが可能となり、鑑賞する身体を意識化が導かれることを理論づけていく。

第3章では、第2章で明らかにした共通感覚としての触覚の議論を、異なる形態の作品を分析することで確認していく。第2章で取り出したキーワードである、身体の拡張および感覚麻痺を考える上で、ナルキッソス神話に言及する。神話に含まれるこうした作用と、その一方でナルキッソス神話における「水鏡」が絵画の起源として、触覚性の観点からも捉えられていることから、「鏡」のモチーフおよび「鏡」に含まれるイメージ効果を扱うものを分析対象として据える。鏡には質的・精神的な特性が含まれており、それらが見る者の身体の拡張や自己切断、感覚麻痺を引き起こす可能性を含んでいるということを明らかにしていく。

第4章では、身体を意識化する鑑賞が持つ可能性を考える上で、昨今議論の俎上に載っている「ポストヒューマン」や、テクノロジーの進展によって引き起こされる「脱身体化」の問題に対して、どのようなアプローチがありうるのかを検討する。身体とテクノロジーとの混淆によって、その境界線が曖昧になっていくなか、身体性を意識化する鑑賞の今後の展望として結論づけていく。

各章を通じて、これまでの鑑賞とは異なる、身体的に作品を受け止めることの可能性や理論的検討を試みるなかで、芸術が社会や人々に対し、現在一般に考えられている以上の価値や意義を明らかにすることを念頭に置いた。それは、芸術が社会の中で生起し、受容され、意味付けされてきた以上、芸術を今日的な意義あるものとして考えることが求められてきていることとも関連しているため、本研究には、芸術の社会における汎用性を考える上でも、その意義を見出すことができるとする。